

### 3-4. 被災者の行動

#### 1. 避難行動

##### 01. 奥尻町では防災担当職員が地震発生3分後に早くも避難放送を行ったにもかかわらずこの放送は津波に襲われた住民の生存と直結しなかったと考えられる。

地震が発生したのは22時17分であるが、それから早くも3分後には、町役場の防災担当職員が防災無線にて全地区の住民に対して「津波の恐れ有り、避難せよ」と放送した(22:20)。奥尻消防署(本署)も指令車を出し奥尻地区にて津波に警戒するよう広報活動を行った(22:21)。これらは独自の判断でなされたもので、日本海中部地震の経験が生かされたものであることはいままでのまではない。しかし、地震発生から3分後という早い時期での放送であったにもかかわらず、また各家々や屋外に受信機や拡声機があったにもかかわらず、津波に襲われた地域の住民にとって、この放送は生存とは直結しなかったと考えられる。後に示すように、住民の多くは地震後すぐに、つまり屋内の受信機からの放送を聞くまでもなく、屋外に出て高台に向かって避難し始めていたし、また屋外の拡声機からの放送は聞き取りにくかったのであった。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.111]

##### 02. 奥尻島では警報に基づく通常の避難行動はほとんどできなかった。

震源地に最も近かった奥尻島では、津波警報が出る前に津波の第1波が襲いかかり、警報に基づく通常の避難行動はほとんどできなかったというのが実情である。そのため津波被害にあった奥尻島住民のほとんどは、避難への心の準備ができないままに津波に飲み込まれてしまったといっても決して過言ではない。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3), p.209]

##### 03. 奥尻町における避難行動の大半は住民独自の判断でなされたものである。

町役場の防災無線、あるいは警察・消防の勧めに従った避難は、宮津や奥尻や富里・米岡、湯浜地区で少数ながら認められた。しかし、大半は、とりわけ津波で家が全て流出した青苗(旧)5区では、住民の独自の判断による自主的避難がなされていた。けっきょく、町役場においても住民においても、独自の判断による行動が行われたのであり、日本海中部地震の経験が活かされたと考えられよう。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.111-112]

##### 04. 地震発生時には住民の88.7%が自宅にあり、約半数が高台への避難を行った。

奥尻町青苗地区の人々に対して行ったアンケート調査(回収数:仮設住宅に住む265世帯の204人)の結果から、津波当日の避難行動の実態について推測してみたい。(中略)アンケートの調査結果をみると、地震が発生した7月12日午後10時17分には、多くの

人はすでに自宅で床についていた(「自宅にいた」人 88.7%、「すでに眠っていた」人 42.2%、「床に入っていたが眠ってはいなかった」人 15.2%)。しかし、地震後の行動は非常に迅速であり、とくに「家族に逃げようと声をかけた」(33.3%)、「高台に向けて避難した」(48.0%)の割合が非常に多くなっている。[『1993年北海道南西沖地震における住民の対応と災害情報の伝達』東京大学社会情報研究所(1994/1), p.14]

05. 約8割の人が緊急避難した。

奥尻町の多くの人々は地震直後に津波の来襲を予測したため、いっせいに高台へ避難を開始した。その避難行動は、非常に迅速だったといえよう。つまり、まず、地震の後どのくらいしてから避難をはじめたかをたずねたところ、「まだ揺れがおさまらないうちに避難しはじめた」人が23%、「揺れはおさまったが、津波がまだ来ないうちに避難しはじめた」人が54.9%と、ほぼ8割の人が緊急避難しており、避難するより早く津波が来てしまった人は2割弱である。[『1993年北海道南西沖地震における住民の対応と災害情報の伝達』東京大学社会情報研究所(1994/1), p.17-18]

06. 平均避難時間はおよそ地震の5.3分後であった。

また、避難した人の平均避難時間は、地震の5.3分後であった。今回の津波災害は、多くの人が就寝していた午後10時過ぎに発生したこと、地震の5分後には津波が来襲し、津波警報も間に合わなかったことを考え合わせると、その避難がきわめて早かったことがわかる。[『1993年北海道南西沖地震における住民の対応と災害情報の伝達』東京大学社会情報研究所(1994/1), p.18]

07. 津波を心配して、車での避難がかなりの数にのぼった。

避難した人々がどのような手段で避難したのかを整理してみた。

- 徒歩または走って避難 . . . . . 2世帯 18人
- 車にしようと思ったが、車庫が開かず断念。走って避難 . . . 1世帯 3人
- 車で避難 . . . . . 2世帯 7人

「車庫が開かず、車をあきらめて走って逃げた」というのは、青苗地区の家族である。また、「車で避難した」と答えているのは、奥尻地区の2家族であり、いずれも近くの知人の車に便乗したものである。「徒歩または走って避難した」家族のうち、青苗地区の1家族をのぞいて、いずれも避難先の奥尻小学校まで徒歩で1~2分から5~6分のところに住んでいる家族である。[『平成5(1993年)北海道南西沖地震 東京都調査班報告書』東京都(1994/1), p.87]

08.車による避難は一時的に渋滞を引き起こした。

新聞やテレビなどで報道されている通り、車による避難がかなりの数にのぼったことは確かなようである。すでに別稿でのべたように、奥尻地区では、山側の住民たちが崖崩れや土砂崩れの危険を避けるため、海岸方向にむかって車で避難しており、逆に、海岸近くの多くの住民は、津波から逃れるために山側に向かって、やはり車で避難している。発災とともに山側から海岸へ向かった車と海岸近くから山側に向かった車とが、奥尻町役場付近で鉢合わせをして一時動きがとれず、車の住民たちが自発的に交通整理を始めて、やっと渋滞状況が解消したという。[『平成5(1993年)北海道南西沖地震 東京都調査班報告書』東京都(1994/1),p.87-88]

09.避難の際の移動手段としては、「歩いて・走って」が多く、ついで自動車の順であった。

避難時の手段としては、「歩いて・走って」が多く、ついで自動車の順であった。もっとも、自動車を用いたか否かは、そもそも自動車を持っているか、障害なく車を出せたか、あるいは各居住地域の地形などさまざまな要因が関与する。青苗低地部の住民について調べると、高齢者は自動車を利用することが少なく、歩いたり、走ったりすることが多かったことが認められた。その理由は定かではない。地震発生から避難までの時間と自動車利用との間に関連はなかった。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5),p.128]

10.車の使用を抑えるという「災害文化」の徹底が望まれる。

車による避難の問題である。徒歩や走って逃げた人の多くは、車が無いが、あるいは車を必要としないくらいに避難目的地が近い人たちであったと言ってもよいであろう。(中略)地域によっては、車による避難のほうが効果的に思えるところもあるかもしれないが、そういったところも含めて、もっと車の使用を抑えるという「災害文化」の徹底が望まれる。[『平成5(1993年)北海道南西沖地震 東京都調査班報告書』東京都(1994/1),p.88]

11.10年前の日本海中部地震をそのための判断目安にした住民が少なくなかった。

北海道南西沖地震における緊急時の避難行動の前提は、激甚被災地奥尻町における多くの証言記録にうかがわれるごとく、あまりにも大きな地震の衝撃によって住民が驚愕させられたことであり、住民の不安感・恐怖感・危機感が即、個々人の臨界値を超えたことである。聞き取り調査によると、10年前の日本海中部地震をそのための判断目安にした住民が少なくなかった。地震の衝撃時、就寝中の住民が多くみられたことに加えて、地震の衝撃とともに停電となったことから、初動の第一次避難行動は、屋内における戸惑いと混乱のなかで屋外に出るという行動であった。地震直後、何が起きたかを理解することができなかったという意見は少なくなかったけれども、戸惑いながら住民は、住

宅の2階から1階に降りることに難儀したり、壊れたり倒れたりした家具調度品の足場に難渋しながら屋外に逃れようとした。しかもそれは、ゆがんだ戸をこじ開けて外に出るという状態だった。そうした状況下において、ガスの元栓を締め、安全性を確かめてから屋外に出たという冷静な対処行動がみられた。さらに日本海中部地震の経験から、個人や家族にとって重要な書類をひとまとめに整理して、日頃から常に枕元に置いており、それをもって屋外に逃れたという災害文化が生かされた避難行動があった。これらはいずれも数少ない冷静な対処行動であった。[『北海道南西沖地震に伴う家族生活と地域社会の破壊と再組織化に関する研究』北海道大学文学部(1999/11), p.14]

#### 12. 津波は予想外の早さと規模で、住民に避難行動の適切な判断の余裕を与えなかった。

北海道南西沖地震の第一次避難行動における決定的に重要な点は、地震後に襲った津波の規模と早さであった。地震の規模から判断して、また過去の日本海中部地震とそれに伴う津波の経験から判断して、津波が襲来するという予測をした住民は少なくなかった。しかしその予測も、どの程度の規模とどれくらいの早さにおいて、津波が襲来するのかということまでを念頭におき、避難行動をとるというものではなかった。証言や聞き取り調査結果からすると、被災者は、地震屋外に出て不気味なうなり音を聞いた時、津波の襲来を察知した。あるいは、屋外に出た時、海面の隆起や自宅近くにすでに寄せてきている波の音で津波の襲来に気づいたということであった。(中略)。しかし予想外の津波の早さと規模は、津波に対する第一次避難行動の適切な判断の余裕を住民に与えないものであった。[『北海道南西沖地震に伴う家族生活と地域社会の破壊と再組織化に関する研究』北海道大学文学部(1999/11), p.15]

今回の北海道南西沖地震発生の際には、5分後に「オオツナミ」警報が札幌气象台より出されている。この警報発令は、手続きとしては物理的に限界に近い程の早さであって、称賛に値しよう。1983年の日本海中部地震の経験が生かされたとみられる。しかし、それらの情報が人々に十分に伝達される暇を与えず奥尻島を津波が襲い、多くの人々の生命を奪ってしまった。生き残ったのは、地震に反応して反射的に高所に逃げた人々であった。[『平成5(1993年)北海道南西沖地震 東京都調査班報告書』東京都(1994/1), p.28]

#### 13. 「地震即津波」と考え、いち早く行動し、津波襲来前に安全地帯に避難を終えた人もいる。

地震が激しく揺れている、その時、家を飛び出し、海を見た。海水がどんどん沖へ引いていく。見たことのない状況である。津波の襲来を察知、大声で隣、近所へ告げ、直ちに行動を取った。家の中の奥さん呼び、履物を履く暇も与えず危険がせまり猶予のない事を告げながら跣のまま連れ出し、津波の押し寄せる前に逃げおうせた。ほんのわずかの時間の差が明暗を分けることとなったのである。[『大海嘯 北海道南西沖地震災害体験記録誌』大成町(1995), p.146]

14. 避難の際に何も持ち出せなかった住民が多かった。

避難の際に何をもち出したかを尋ねた（この回答にも、回答者個人の状況というよりは家族の状況が書かれている可能性が高い）。整理の結果、何も持ち出せなかったという回答が多いが、懐中電灯を持った者も少なからずいた。地域差があり、青苗（旧）5区の住民では何も持たなかった者が特に高率であった。時間的余裕がなかったことが窺われた。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.132]

15. 日本海中部地震の経験については、大多数の住民が「役に立った」と評価していた。

日本海中部地震の経験については、大多数の住民が「役に立った」と評価していた。津波被害の大きかった青苗地区の住民において、評価はとくに高かった。[『災害の心理学とその周辺 - 北海道南西沖地震の被災地へのコミュニティ・アプローチ - 』若林佳史(2003/5), p.132]

16. 機敏な避難と「逃げたら戻らない」のが鉄則。

津波のときは機敏に避難するかどうか生死の分かれ目になる。しかも、それが実にきわどいところで助かったり、助からなかったりする。云うならば、これは津波と人間との分秒を分ける争い、闘いなのである。したがって津波防災の最も肝心な問題は、単純明瞭だが身を守るために如何にして機敏に避難するか、避難させるかの一点にある。（中略）北海道南西沖地震のとき、震源に近い奥尻島の青苗地区には、震後、数分で津波が押し寄せて来た。東京大学社会情報研究所の広井愷教授らのグループが行った聞き取り調査によると、家が渚に近い人たちでも、それこそパンツ一枚で高台に向かって走った人や、風呂上がりでバスタオルを羽織ったまま家を飛び出して逃げた人、ご主人と二人、まるで短距離競争のようにして走った人たちは、きわどいところで助かっているという。反対に、亡くなった人たちのことについて生存者に聞いたところ、着替えの後、物を探していて逃げ後れたらしい人、車の鍵を探すのに手間取って逃げ後れたらしい人、歩いて避難したり、後れて車で避難したために、波に追いつかれたと思われる人たちの話が多かったという。[『津波の恐怖 - 三陸津波伝承録』山下文男(2005/3), p.93-95]

17. 津波のとき「靴を履いて逃げる」余裕などは、まず、ないと思うべきである。

最近のことだが「津波に襲われた時はどうする」との設問に対して「とにかく逃げる……」としたうえで「靴を履いて歩いて逃げましょう」と教える、ある「地震津波研究会」発行の『津波ハンドブック』というのがあって首を傾げざるをえなかった。「とにかく逃げる」も、この後で書いているように、車での避難はなるべく避けるも、そういう意味での歩いて逃げるも、全くそのとおりだが「靴を履いて……」は、

余計なお節介と云うよりも、これまでの津波災害の教訓に照らして、不適切なアドバイスと云うほかない。けっして「揚げ足」をとっているのではない。(中略)前記のように北海道南西沖地震津波の教訓の一つとしても指摘されているが、逃げるときは、時間を無駄にしないよう、なるべく早く、速くというのが鉄則であって、状況にもよるが「靴を履いて歩いて逃げる」余裕などは、まず、ないと思うべきである。取材でたまたま奥尻島に行っていてこの津波に会い、九死に一生をえた水中写真家・中村征夫さんの講演(「大地震からの生還」)を聞いたことがある(釜石市「地震に強いまちづくりシンポジウム」2004.11.27)。津波で全滅した奥尻島・青苗地区の岬から数軒目の民宿に泊まっていたのだという。宿泊に際して「津波が来たら高台に逃げるように」と云われていたが、いざ地震になったら、自分の中では地震と津波の発生が結びつかなかった。ところが地震の後、直ぐさま宿のおくさんが「津波が来るから早く逃げなさい」と、大声で注意してくれた。そこで「靴をはこうとしていたところ」、かさねて「靴なんか履いてる場合じゃない」と怒鳴るように急き立てられたので、裸足で屋外に飛び出し、真っ暗な夜道を高台に向かって走った。お陰で自分は、きわどいところで助かったと、宿の人たちに、たいへん感謝していた。併せて、当夜の事をいろいろと振り返り「ちょっとした油断のあった人たちが波にのまれたのではなかろうか」と話していた(『岩手東海新聞』2004・11・29)。[『津波の恐怖 - 三陸津波伝承録』山下文男(2005/3), p.95-96]

#### 19.津波に壊された車は爆発するような音を出していた。

7月12日月よう日10じ17ふん。おおきなじしんがありました。そのときは、おばあちゃんとねていました。ねてたらがたがたとうごきました。びっくりしました。そしたらおとうさんがきて、「そとにでなさい。」と大きなこえでおこったようにいいました。そのときは、おばけがでたのかとおもいましたが、くるまにのってにげるときに、水がはいってきたので、つなみだとおもいました。わたしは、おかあさんにだかれてましたが、水がはいってきたので、おかあさんからはなれましたが、水をすこしのんでしまいました。くるまからおりて山にむかってにげました。山にいと、くるまのこわれたおとがばくはつするようにおとにきこえました。みんなが、「すごいね。」といいました。すごくこわかったです。山でたきびをたいてあさの3じまで山にいました。山にいてもじしんがきました。じしんのときは、おじいちゃんは、おきにいました。わたしは、おじいちゃんをしばいしました。でもぶじだったのでよかったとおもいます。もうじしんもつなみもこないでほしいです。[『体験文集 災害を乗り越えて』奥尻町立稲穂小学校(1994), p.3]

#### 20.避難中に水が車の中に入ってきた。

わたしたちは、くるまでにげました。そのときわたしは、どっかにいくのかなとおもいました。くるまにのってにげているとちゅうでなみがどうろまできました。そして、だ

んだんくるまに水がはいってきました。あごのところまでできました。すごくつめたかったです。そして、くるまからおりて山へにげました。わたしたちがさむかったので、まなみさんうちのおとうさんが火をたいてくれました。からだがほっかほかになりました。よるの3じはんごろまで山にいました。[『体験文集 災害を乗り越えて』奥尻町立稲穂小学校(1994), p.4]

21. 津波の怖さに歯がガタガタと鳴り出した。

ゴーなにかすごい音がして今日のうみは、しけかなと思いました。するとお母さんがはいってきて、「おきなさい!」と、てをひっぱりながら言いました。それで、車にのってとうだいの下まで行ったらおじいちゃんが、「とうだいさあがれ!」と、いいました。どうしてあがるんだらうと思ってお母さんにきいてみました。「どうしたの?」するとお母さんは、「つなみだよ!」ぼくは、かんぜんに目がさめました。それでとうだいのところまでのぼりました。そしたら、「門のところにつかまっていなさい!」と、お母さんがいいました。それでぼくといもうとと二りでつかまっていました。そしたらひとりではがガタガタとなりだしました。それは、さむさではなく、つなみのこわさだったのかもしれない。三分ぐらいしてお父さんがぼくたちのふくをもってきてくれました。ふくにきがえたあと、おばあちゃんがおにぎりをもってきてくれました。おにぎりは、車の中でたべました。車の中があつくて外にでてみたら、いまにもなみがきそうなすごい音がしました。そのよるは、ずっととうだいにいておきていました。それでやっとあかるくなりました。そして、とうだいからみんしゅくを見たらはんぶんながされていました。ぼくは、自ぶんの家もながされていないかなあとしんぱいしました。でも、ぼくの家は、たすかっていました。ぼくは、すこしほっとしました。ぼくは、つなみが二どとこなければいいと思いました。[『体験文集 災害を乗り越えて』奥尻町立稲穂小学校(1994), p.5]

22. 避難中に引波にやられた車から逃げ出し、自宅に戻って二階に上って難を逃れた。

私たちがねている時、じしんが、きました。おじいちゃんがいそいで、「おきれー、つなみがくるよ、おきれ。」と、言いました。私たちは、くるまにのりました。げんかんから、おとうさんとおばあちゃんがいっしょにでました。ひきなみに私ののっている車が、かこいのはしらにぶつかってしまいました。そのひょうしに、車の戸があいたので外に出ました。私たちは、すぐ、家にもどって、二かいにあがりました。二かいにあがるとちゅうなみが、かいだんの下から、四だんか三だんの所までできました。その時、足をガラスで、切ってしまいましたが、なんにもかんじませんでした。その時、お母さんがいないと思いました。お父さんが、さがしに行きました。お父さんが下におりていきました。私は、「おりるな」と思いました。お父さんは五分ぐらいしてもどってきました。お母さんは、車でながされたけど、すずきしょう店の上の山にいました。私は、お母さんだけ、車にのってたから、ながされたかと思いました。お母さんがもどってきて、私の足に夕

オルをまいてくれました。[『体験文集 災害を乗り越えて』奥尻町立稲穂小学校(1994),p.8]

#### 23. 転んで怖くなって動けなくなったが、隣人の大人に助けてもらった。

私は、おふろにはいったのではだかで外にでました。私はおふろで、くもたいじを、していました。私は、はじめくものおかえしかと思いました。私は、「じしんだとしんじられない」と思ったんだけど、ふろばとげんかんはとてもちかかったので30秒くらいで、外ににげられました。私は、おふろばからあがってすぐにすべってころびました。私は、じしんがくるなんて、心の準備ができていなかったのも、とつても、あわてていました。だから私は、ころんでだんだんこわくなってきてうごけなくなりました。そしたら、しりあいの、さんが、だっこして外までつれていってくれました。そして、一回地しんがおさまってから、きがえをとりにはいりました。そして坂を、上っていると中で後ろを見たら、みなとから波がいっぱいあがってきて、大人の方はみんなふねをあげていたから、私の家の前のなみよけのと中までながされました。私は、こわくなってなきだしてしまいました。[『体験文集 災害を乗り越えて』奥尻町立稲穂小学校(1994),p.10]

#### 24. いち早く避難し、津波被害を逃れた人々の体験談（奥尻町青苗区Kさんのケース）。

まず、青苗5区のKさん(女・30代)から。Kさんは、5区のなかでも徳洋記念碑に近いまさに島の南端に住居があり、避難場所の高台からはかなり離れている。家族は、Kさん夫婦と子供2人とご両親の6人である。地震発生当時、ご主人は2階でくつろいでおり、Kさんは風呂上がりであった。強い揺れを感じたKさんは、バスタオルを羽織って外に飛び出し、玄関先に置いてあった車につかまって揺れがおさまるのを待ったという。Kさんは、10年前の日本海中部地震で津波を経験しており、地震の揺れがそのときよりずっと大きかったので絶対に津波がくると思い、すぐさま避難しようと、寝ている子供たち(8才・6才)を起こしに家のなかに入ろうとしたが、玄関は開かなくなっており、仕方なく窓から入って2人の子供を連れ出した。玄関のなかからご主人の来る音がしたので、ご主人も後からくるだろうと思い、バスタオルを羽織ったまま、子供2人と駆け足で逃げだした。やがて、息が切れてきたが、高台に向かうため通りの十字路を左に曲がったところで、両親を乗せて逃げてきたご主人の車が来たのでそれに乗り、家族6人を乗せた車は一気に高台の住宅地に駆けあがったという。[『1993年北海道南西沖地震における住民の対応と災害情報の伝達』東京大学社会情報研究所(1994/1),p.11-12]

#### 25. いち早く避難し、津波被害を逃れた人々の体験談（奥尻町青苗区Iさんのケース）。

次にあげるのは青苗2区のIさん(男・60代)の体験。地震が起こったとき、Iさんは2階で床について眠っていた。大揺れがはじまったとたん、父さん地震だ!と奥さんに声を

かけられ、すぐ飛び起きたが、とても立ってられないほどの揺れで、屋根が落ちて家が壊れると思ったという。揺れの続くなかを奥さんと一緒に階段を降り、茶の間に入ると、タンスが倒れたりコップが割れて飛び散ったりで、足の踏み場もないほどだったが、こんな大地震ならきっと大津波がやってくると思い、すぐに着替えをして避難しようとした。着替えはいつも袋に入れてすぐわかる場所に置いてあったが、地震直後に停電になり懐中電灯も見当たらず、柱につるしてあるペンライトを頼りに着替えたので、多少時間がかかった。外へ出ようとする、冷蔵庫が倒れて戸口をふさぎ、外へ出られない。どうやらこうやら冷蔵庫を動かして、やっと出るだけの隙間を作って外に出ると、地震であわてて飛び出した人たちが何人がかたまってざわざわしていた。そこで、「このバカものが。津波がくるぞ!」と怒鳴ったという。そして、ペンライトを照らしながら近くの浜に行って、軽四輪車のエンジンをかけ、高台に避難した。避難する途中に親戚の家があって、奥さんが「父さん、迎えに行かにゃ、連れて行かにゃ」と言ったが、津波がいつ来るかわからないと思ってあえて無視した。しかし親戚の人は、結局みんな無事だったという。Iさんたちが車で走っているときはほとんど人影がなく、避難する車もなかった。このへんでもっとも早く避難したのだろうというが、高台についてしばらくすると、左手のほうから10メートルはあろうかという巨大な津波がやってきた。なお、青苗1区や2区に巨大な津波が襲ったのは、地震発生から17~18分後だったようで、5区にくらべて避難するのにいくらか余裕があったという。[『1993年北海道南西沖地震における住民の対応と災害情報の伝達』東京大学社会情報研究所(1994/1), p.12-13]

## 26. 他人にいわれてことの重大さに気づき、避難して津波被害を逃れた人々の体験談(奥尻町青苗区Hさんのケース)

たとえば、Hさん(女・50代)もその一人である。地震が起こったとき、Hさんの夫は漁で沖におり不在で、彼女は床に入って眠りにつく前だったが、地震に驚いて裸足で飛び出し、外の物干しにつかまっていた。恐くて泣き叫んでいたが、まわりの人は誰も出てこなかったという。揺れがおさまると、Kさん(道路をへだてて向かい側の家)がガスの元栓を閉めたかというので、裏に行って閉め、靴を履いてまた物干しのところに行ったとき、Yさん夫婦がパンツ一丁で逃げてきた。そして、「かあさんこんなことしてはだめだ、一緒に逃げよう」と手を引っ張ってくれた。そのとき裏のOさんの母親から、息子が兄のところに行っているのだから迎えに行ってくれといわれたが、Yさんが「そんなことしては大変だ、自分の身が大事だから早く逃げよう」と言ったので、耳には残ったけれども細い道を燈台に向かい、走って避難した。高台につくと、知人が大きな鞆を持っていたので、自分も(家が近いから)大事なものを取りに行きたくなり、戻っていったらもうすでに家はなくなっていた。その直後、ここにいたら駄目だという声を聞いたので、ふたたび高台に避難したという。Hさんは、Yさんが来るまで津波のことなど考えもしなかったようである。Hさんの自宅は、青苗5区のなかで高台のもっとも近くにあり、10

年前も津波はここまで来なかったので、今回もまさかと思ったのであろう。[『1993年北海道南西沖地震における住民の対応と災害情報の伝達』東京大学社会情報研究所(1994/1),p.13]

#### 27.他人にいわれてことの重大さに気づき、避難して津波被害を逃れた人々の体験談(奥尻町青苗区 Aさんのケース)

Aさんも、最初は津波を予想せず、家人にいわれて急いで避難した一人である。地震が起こったとき、Aさんは居間で横になってうとうとしていたが、日本海中部地震のとき小学3年生だったこともあって、当初は津波のことは念頭になかった。しかし、家族が津波が来るというので外へ出ようとした。このとき地震で戸が開かなくなっていたが、戸を蹴って外に出た。自宅には歩行が困難な祖父がいるので、Aさんは車で避難しようと考え、家のすぐ横に駐車してある車のエンジンをかけ、祖父が出てくると同時に車をスタートさせたという。Aさんの避難時刻はかなり早かったようで、車にものを積み込むなどという余裕はまったくなく、Aさん自身も靴も履かずに裸足で車を運転している。[『1993年北海道南西沖地震における住民の対応と災害情報の伝達』東京大学社会情報研究所(1994/1),p.13]

#### 28.車で避難して遭難した話(奥尻高等学校生徒 T・Hさんの体験文)

この度の北海道南西沖地震でこの奥尻島青苗で多数の死者と被害を受けた人がいます。私もその被災者の一人です。今回の地震は2回目で1回目の中部地震とは全然違っていて私自身、今こうして生きているのが不思議でたまりません。その地震のあった7月12日、いつもの通りの生活を送っていました。私が母より早くアルバイトから帰ってきて寝ようかどうかという時、地震がおきました。次第に地震の揺れは強くなり、電気は消え、その時一緒の家で暮らしている祖父母の部屋へと走りました。その地震の揺れは長く長い時間のように感じました。揺れがおさまってから家から出ようと思って、私は必死に祖父母を起こしました。お母さんは外から大きな声で叫んではいるけれど、戸が壊れて3人が脱出するのにかなりの時間が掛かりました。その日お父さんはいか釣り漁に出ていたので車が5台あっても1台も動かすことができませんでした。その時私の頭をよぎった事が祖父母だけでも、どこかの車に乗せてもらおうと思いました。その時です。私のいとこの人の車がバックして来ました。私とお母さんは、祖父母を連れて走りました。そしたらその家のお母さんが車から降りてきてくれて、祖父母と合わせて5人を乗せた車はものすごいスピードで走り出しました。それが最後でした。私とお母さんといとこのお母さんは、もうだめだと思いながらも必死に高台を目指して走りました。そして、大きい坂に差しかかりました。その時です。津波の音を耳にしました。それは今までに聞いたことのないような音でした。坂からは「津波だ!逃げろ!」という絶叫とともにたくさんの人が坂から降りてきました。私たちは進行方向を変え、今思えばどこを

どうきたのかははっきり覚えていません。そしてやっとの事で、一番高い所の団地にきました。その時もう家はありませんでした。同時に火災が発生しました。私は見た事はないけど第二次世界大戦にタイムスリップしたような感じでした。それで、いとこのお母さんと5人乗りの車を探しました。次の日の朝まで歩きとおして、自分の家のあった所に行きました。その時一度も私たちの前では涙を見せたことのないお父さんが泣いて、私たちを呼びました。そしてその災害から2日目経ち、祖父が記念碑の浜に打ちあげられていました。私は10年分も20年分もの涙を流したような気がします。2週間ぐらいで5人全ての遺体はあがりました。私にとっても、家族にとっても祖父母は偉大すぎました。これから私はこの二百数十人と家屋や船を一のみにした津波が憎たらしく、生涯忘れることはないでしょう。今、この余震が続く中でこの事が夢だったらどれくらい幸せだろうと思います。[『北海道南西沖地震記録集』北海道奥尻高等学校(1994/2), p.14-15]

## 2. 避難所の開設

### 01. 奥尻町では応急仮設住宅に入居するまで体育館と公民館が避難場所として活用された。

応急仮設住宅に入居するまでの避難場所を見たのが、図9.4(重複回答)である。体育館と答えたものが79%、公民館と答えたものが78%と、体育館や公民館が活用されたことがわかる。親戚や知人宅と答えたものが約5割が存在する。『自動車の中』で生活していたものもある。(4世帯)。[『北海道南西沖地震復興過程に関する調査研究』財団法人都市防災美化協会(1995/7), p.168-169]

### 02. 7月18日奥尻町の100戸を始め、約50箇所の避難所や応急仮設住宅が設置された。

7月13日0時30分に、特に被害の大きい奥尻町に災害救助法が適用され、その後、6時に大成町、10時に瀬棚町、島牧村、15時に北檜山町にも同法が適用されたことから、関係支庁を通じ各町村に対し、避難所の設置、炊出しなど被災者の応急救助の実施について指導を行った。翌14日には、応急救助についての指導、連絡調整のため、檜山支庁へ職員1名を派遣した。また、15日には、甚大な被害を受けた奥尻町へ第1次として、生活福祉部及び檜山支庁社会福祉課から26名の職員を派遣し、その後、9月18日までの間に10次にわたって89名を派遣し、仮設住宅の設置や入居など災害救助法による応急救助に関する事務や災害弔慰金の支給事務、被災住民への各種生活相談の実施などについて支援した。[『平成5年(1993年)北海道南西沖地震災害記録』北海道(1995/3), p.31]

仮設住宅の建設開始は、奥尻町(7月18日 - 100戸)から始まり、瀬棚町(7月24日 - 14戸)、大成町(7月28日 - 23戸)、北檜山町(8月24日 - 35戸)と続いた。しかし他の被災3自治体を除き、奥尻町では、大規模な被害のために仮設住宅の建設が第1次から第4次 - 第1次(7月18日)、第2次(7月25日 - 100戸)、第3次(7月30日 - 100戸)、第4次(8月26日 - 30戸) - まで順次なされた。結局、4被災自治体において、合計402戸の

仮設住宅が相次いで建設された。[『北海道南西沖地震に伴う家族生活と地域社会の破壊と再組織化に関する研究』北海道大学文学部(1999/11),p.19]

03. 奥尻町では7月27日より330世帯899人が、バス・トイレ付きの1DKで約3年余に渡って生活。

奥尻町では、仮設住宅の建設に際して、リースとはいえ、仮設住宅の建設資材が緊急にかつ大量に必要とされたために在庫不足が心配された。しかし、避難所における事前の仮設住宅入居希望世帯調査と民間建設業者との協力態勢が功を奏し、1ヶ月半の短期間に予定された全仮設住宅330戸が完成した。しかしそれは、海路による資材搬入という輸送上の問題や24時間体制の突貫工事という問題を克服してのことであった。仮設住宅の完成をまって早速、入居は開始された。仮設住宅は、入り口が背中合わせになった箱形の平屋2軒長屋式住宅であり、小さいとはいえバス・トイレ付き1DKであった。奥尻町ではこの仮設住宅に、平成5年7月27日より順次、330世帯899人が生活することになった。仮設住宅は、最終的に平成8年12月までに撤去されたから、この間の3年余が仮設住宅生活の時期となった。[『北海道南西沖地震に伴う家族生活と地域社会の破壊と再組織化に関する研究』北海道大学文学部(1999/11),p.19]

04. 応急仮設住宅の居住環境の問題点として「隣家の騒音」を上げる人が多かった。

雨漏り、結露などの居住環境の問題点をみたのが、図9.6である。「隣家の騒音」を上げる人が多く、つぎに「すきま風」、さらに「敷地の水はけ」をあげる人が多くなっている。ほぼ半数の世帯で以上の問題点が指摘されている。2戸1棟あるいは粗悪構造の問題点が騒音問題や隙間風問題をもたらしめているとみることができる。隙間風は、高台に建てられた住宅が多いという奥尻の特殊事象を反映しているものと考えられる。[『北海道南西沖地震復興過程に関する調査研究』財団法人都市防災美化協会(1995/7),p.169]

05. 応急仮設住宅の生活上の問題点として「仕事に不便」、「買い物に不便」などの立地上の問題が多く訴えられた。

住生活上の問題点あるいは住機能面の問題点をみたのが図9.7である。「買い物に不便」、「夏暑く冬寒い」、「音が伝わりやすい」と答えるものが、いずれも60世帯をこえ、ついで「仕事に不便」と答えるものが52世帯と多くなっている。そのなかで、「最も困っていること」をつけてもらったが、この解答(94世帯が回答)をみると、「仕事に不便」(23世帯)、「買い物に不便」(15世帯)、「通院通学に不便」(13世帯)と立地上の問題を訴えるものが多い。[『北海道南西沖地震復興過程に関する調査研究』財団法人都市防災美化協会(1995/7),p.169-173]

06. 応急仮設住宅の規模上の問題点として「家財道具等の保管場所がない」という回答も最も多かった。

仮設住宅が狭いことによる問題点を尋ねた結果が、図9.8に示される。「家財道具等の保管場所がない」と答えるものが、7割(125世帯)と最も多くなっている。次いで「風呂や便所が狭い」と答えるものが、6割(110世帯)と多い。「応接間がない」、「プライバシーがない」、「病気の時に休む場所がない」と答えるものも3割存在している。狭さの問題を感じていない世帯はわずか5世帯にすぎない。[『北海道南西沖地震復興過程に関する調査研究』財団法人都市防災美化協会(1995/7), p.173]

07. 奥尻町における調査で明らかになった応急仮設住宅の問題は、狭さ、形式、構造、立地の4つに大きく分けられる。

今回の調査で明らかになった応急仮設住宅の問題点は大きく分けて4つある。第1は、狭小性からくる問題である。今日の生活水準や家財道具にみあった住宅規模の設定が必要と思われる。第2には形式に関わる問題で、2戸1棟という形式は隣家とのプライバシーの面で大きな問題を残したといえる。第3は、構造に関わる問題で、寒冷地など地域特性を踏まえて、構造面で柔軟に対応する仕組みになっていないということである。地域の特性に応じた仕様や構造が求められるということである。第4は、立地に関わる問題で、奥尻の高台に設置された仮設住宅で、仕事や買物に対する不満がでている。仮設住宅の用地確保に問題があり、モービルハウスなど別の手段の活用をはかることも考えてよいのではないか。[『北海道南西沖地震復興過程に関する調査研究』財団法人都市防災美化協会(1995/7), p.173-174]

08. 災害翌日には、檜山管内10町のうち今金町、厚沢町を除いた8被災自治体が避難所へ。

第二次避難行動である避難所への避難は、避難所施設への避難に他ならなかった。このような避難は、檜山管内10町のうち今金町、厚沢部町を除いた8被災自治体においてなされた。避難所施設への避難は、主に災害の翌日においてなされた。ちなみに、避難所に避難した被災者は、奥尻町 - 1,055人、江差町 - 720人、上ノ国町 - 約2,300人、乙部町 - 約1,750人、熊石町 - 1,186人、大成町 - 170人、瀬棚町 - 1,060人、北檜山町 - 184人であった。改めて、後述するが、仮設住宅が設置された被災自治体は、奥尻町、大成町、瀬棚町、北檜山町であったから、これらの被災地では、仮設住宅が完成するまで避難所生活が続くことになる。[『北海道南西沖地震に伴う家族生活と地域社会の破壊と再組織化に関する研究』北海道大学文学部(1999/11), p.16-17]

09. 避難所生活当初はその不自由さが課題として指摘されたが、料理を作るなど徐々にリーダーも生まれた。

避難所生活の開始後2週間は、多くの被災者にとって、はじめての避難所生活の経験であったから生活の不自由さはいかんともしがたかった。衣食住の不自由さ、睡眠不足、プライバシーの欠如、心身の不安定さが主要な課題として指摘された。さらにこの避難所生活は、親族・近隣・友人・知人の安否を気遣いながらのものであったし、被災者自身ないし被災者家族における今後の生活再建—おぼろげながらであるにしても—をいかに図るかを考えながら、という重い課題を背負っての生活であった。[『北海道南西沖地震に伴う家族生活と地域社会の破壊と再組織化に関する研究』北海道大学文学部(1999/11), p. 17]

ライフラインの復旧にともなって、救援物資を活用しながら被災者自身—とりわけ女性を中心に—が献立を考え、料理をつくり始めたということであった。料理づくりにかかわることが、被災者にとって災害の衝撃を一次的にせよ回避することになった。献立に必要な材料が不足した場合、被災者より役場職員に要望が出され、役場職員がそれに応えるという状況が生み出された。さらに、このことに伴い避難所における被災者と町役場の対策本部とを接続するリーダーが生まれ始めた。[『北海道南西沖地震に伴う家族生活と地域社会の破壊と再組織化に関する研究』北海道大学文学部(1999/11), p. 17]

10. 天皇陛下ご夫妻のお見舞い訪問は、被災者の災害の痛手が軽減され、再建への意欲となった。

島外者による災害見舞いの訪問によって、被災者の災害の痛手が一次的にせよ軽減させられたり、再建への意欲を醸成する萌芽が生み出され始めた。被災者の身近な親族・友人・知人はもとより、政府関係者、皇族関係者の訪問が北海道南西沖地震においてみられた(注、政府関係者では、7月14日の宮沢首相の現地視察をはじめ各省庁の責任者の現地訪問が続いた)。とくに、天皇陛下ご夫妻のお見舞い訪問は、被災者に「ココロの復興」への糸口を与えるひとつの契機になった。中高年齢層の被災者において、目の当たりにした天皇陛下ご夫妻のお見舞いと言葉の交換は、災害後の年数を経過しても語り継がれているからである。[『北海道南西沖地震に伴う家族生活と地域社会の破壊と再組織化に関する研究』北海道大学文学部(1999/11), p. 18]